

<第二日>

5月22日(日) 午前10時

研究発表

第五室 (本館4階 D401 教室)

司会 慶應義塾大学教授 井出 新

イギリス・ルネサンス演劇のマルチプル・プロット
ロバート・グリーン『ベイコンとバンゲイ』の state を巡って

弘前大学教授 田中 一 隆

周知のように、英国ルネサンス演劇には、一つの劇の中に複数の筋が共存する「マルチプル・プロット」構造を持つ劇がきわめて多い。従来の研究は、この構造を主に作品の内的な関連性の観点から考察してきたが、それらの研究は筋の有機的関連から見ると分裂としか言いようのない作品が数多く存在する理由を適切に説明することができなかった。これらの作品には、複数の筋が時には劇の最後までほとんど噛み合わずに展開し、表面上は作品の構造的な統一が見られない作品も存在するからである。

しかし、このような分裂的なプロット構造を持つ作品を、筋の有機的な構成の観点からではなく、使われている言葉や表現の細かい側面に着目してみると、複数のプロットの分裂に統一的な視点を提供する言葉や概念が存在している場合が多いことに気づく。このような言葉や概念を手がかりにして、複数の筋を多面的・総合的に受容することができたのは当時の観客だけである。当時の劇作家は、観客が批判的・複眼的な視点を通して複数の筋の構成を解釈することができるような仕組みを組織しようとしていたと考えられるのである。

本発表では、英国ルネサンス演劇におけるマルチプル・プロット構造の嚆矢とでも言うべきロバート・グリーン『ベイコンとバンゲイ』を取り上げて、本作品のマルチプル・プロット構造の意義を、観客論的な視点から論じてみたい。

『ヒアロウとレアンダー』の「海を行く婚礼」
ヘレニズム時代の小叙事詩からマーロウと祝祭的喜劇の世界へ

お茶の水女子大学准教授 清水 徹 郎

Christopher Marlowe の *Hero and Leander* は紀元後5世紀後半頃の詩人 Mousaios Grammatikos による同名のギリシア語のエピリオンと Ovidius Naso の *Heroides* を主たる典拠とする大胆な翻案として知られるが、有名な悲恋の結末を省き、祝祭の場で出会った恋人同士による求愛の遊技と、海峡を泳いで渡り、ついに肉体交渉で結婚を成就するまでの行程とを歌うものになっている。Marlowe の念頭には Mousaios の詩の初めに出てくる「海を行く婚礼」のイメージがあり、ヘレニズム時代の牧歌詩人 Moskhos の *Europa* などをモデルにして、それを叙事詩的に展開したものと思われる。発表では、Marlowe が典拠とした可能性のある作品の16世紀のエディションを比較検討するとともに、悲恋の伝説から教訓性を廃し結婚への過程を祝祭的な愛の冒険としてアイロニーを交えつつ歌ったことの意味を考察する。Marlowe とヘレニズム時代の牧歌詩人には、叙事詩および祝祭へのノスタルジーと、遅れてきた詩人としての自覚が共有されている。

Malory や Shakespeare(?) を読む Peter Heylyn King James への追従をめぐって

慶應義塾大学名誉教授

たか みや とし ゆき
高 宮 利 行

Peter Heylyn (1599-1662) の地理学書 *Microcosmus* (1621) は、7回重版され、歴史や文学への言及が多いにも関わらず、言及されることは少ない。英文学では、第2版 (1625) にマクベスの記述があるので、数名の研究者が扱っている。しかし主人公が Machbed と綴られている点などから、発表者は、ヘイリンの種本が今は失われた書か、あるいはシェイクスピアの上演を耳で聞いた記憶によるものではなかったかと推察する。

『マクベス』にはエドワード懺悔王の「王の病」に関する場面がある。*Microcosmus* で注目すべきは、ヘイリンがマクベスの話とマロリーの『アーサー王の死』にある「サー・アリーの治癒」を取り上げて、ジェームズ国王の偉大さに追従した場面である。後者では、ジェームズ国王による瘰癧 (king's evil) という当時の不治の病の治療と、アーサー王自身ではないが、この世の最良の騎士ランスロットの触診によるサー・アリーの治癒と重ね合わせている。かくして、ヘイリンによる国王への追従は成功したかに見えた。



第六室 (本館4階C402教室)

司会 九州大学教授

おお た かず あき
太 田 一 昭

シェイクスピア劇における「こども」表象 社会の転覆または再生への仕掛け

福岡女子大学大学院

くに さき りん
國 崎 倫

近年、「こども」に関する研究がめざましい。しかし、子供と大人の境界を明白にし、「こども」を定義づけるのは困難である。「こども」は大人を映し出す鏡であり、自らを大人であるとする人間の中にも「こども」が存在するからだ。

今日、「こども」に関する批評理論は定まっていない。「こども」はシェイクスピア作品において、ほぼ未開拓の分野といっても過言ではなく、今までの他者表象の知見を応用して論じなければならない。

本発表では、近年なされている見解にくわえ、16、17世紀イギリスの社会背景をもとに「こども」の定義を試み、これまで注目されることのなかった脇役の「こども」たちに祝祭的痴愚の性質がみとめられることを考察する。「おとな」とされる社会的権力者との関係を手がかりに、「こども」であることの意味と存在意義について考察し、「こども」と道化の違いについても、あわせて触れながら、シェイクスピア劇における「こども」の表象が演劇かつ現実世界を射貫くそのあり様を提案したい。

墮ちる軍神／凱旋する母 *Coriolanus* と James I の外交政策

東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員

つか だ ゆう いち
塚 田 雄 一

Coriolanus では、敵軍を率いて母国 Rome に迫った Coriolanus が母 Volumnia に説得されて攻撃を取りやめた挙句、後に敵軍に殺される一方、結果的に息子を死に追いやって国家を守った Volumnia は“our patroness”と讃えられて Rome に凱旋する。この息子の死と母の勝利という特異なテーマは、これまで主に精神的に解釈されてきたが、当時の政治情勢をふまえて改めて読み解く必要がある。

17世紀初頭、Catholic の強国 Spain に対する外交政策をめぐり、国内は Protestant 好戦派と James I の平和外交支持派に分裂していた。前者が再び人気を集めていた前君主 Elizabeth I を Queen Anne とともに戦争の女神として表象し、戦争推進の旗印とする中、後者は Elizabeth I を武力ではなく信仰の篤さと思慮深さによって England の平和を守り抜いた女王として再評価していた。本発表は、こうした背景と *Coriolanus* に織り込まれた〈征服者幻想の崩壊〉というモチーフの關係に着目し、本作品が初演時にもっていたと考えられる政治性を考察する。

~~~~~  
司会 東京女子大学大学院特任教授

く初き あき こ  
楠 明 子

## “To furnish the inward parts” Passions in Ben Jonson’s *Hymenaei*

セント・アンドリュース大学大学院

し みず あき ひこ  
清 水 章 彦

In my presentation, I will examine Ben Jonson’s masque *Hymenaei* (1605-06) and discuss Jonson’s concerns for representing passions in both the outward and inward levels of the masquer’s body. In the preface to *Hymenaei*, Jonson speaks of the way he wishes to convert the transitory entertainment into something more purposeful and educational. Jonson’s emphasis on the neo-Platonic inward education, however, should be examined with regards to his genuine interest in the outward elements of the body. In order to examine the correlation between the two, I would like to re-consider Jonson’s theory of humours characterization, and flag its relevance to the early modern theory of passions by Thomas Wright. Drawing on the uncertainty and uncontrollability of passions, I will examine the characterization of ‘Opinion’ and relocate Jonson’s text within the contemporary texts on Opinion.

## Marvell が Horatius に及ぼした影響について

【招待発表講師】東京大学大学院教授

たか だ やす なり  
高 田 康 成

Marvell と Horatius との關係は、一見明らかなようでいて、実ははっきりとしない。もとより両者の作品は等しく難解を極め、その關係を比較検討しようなどという試みだけでも無謀の誇りを免れがたい。しかし両者に共通するテーマは、表面的にはすこぶる明らかである。例えば、(一)「共和政」と「(絶対)君主政」という西洋政治史に言う二大権力形態の確執と轉換を時代背景としてもち、その混乱にのっぴきならない形で関わっていること、(二)そしてそのような混沌にあって、ある種の平安を求めべく、「心の住処」(たとえば「庭」)を詩という形で構築しようとしたこと。「心」の次元では、キリスト降誕以前に生きた Horatius と宗教改革の

大波を受けた Marvell とでは、殆ど比較を絶するだろう。政治的時代背景の面でも、古代の二大政治形態と近代のそれとでは、同日の談とはいかないだろう。さてどうしたらよいものか。

---

## 第七室 (本館 4階 D402 教室)

---

司会 釧路公立大学准教授 いちかわ ちえ子 市川千恵子

### 放浪者メルモスを継ぐ者 ヒースクリフの出自をめぐって

---

東京女子大学大学院 さくま ちひろ 佐久間千尋

エミリー・ブロンテの『嵐が丘』(1847)におけるヒースクリフの出自にまつわる謎は、未だに尽きぬ議論を呼んでいる。彼の人物像を探る上で最も有力な手がかりを提供するであろうネリー・ディーンでさえ、彼の生まれについては不明だと述べるにとどまっている。本発表では、ネリーが晩年のヒースクリフについて思いめぐらす中で“I had read of such hideous, incarnate demons.”(330)と語る箇所に着目し、ネリーが読んだ物語が実在するという前提に立ち、これを悪魔と契約を交わした人物を描いたチャールズ・ロバート・マチューリンの『放浪者メルモス』(1820)ではないかと仮定することから議論を始める。ヒースクリフの形容には「悪魔」に関する表現が多用されており、両作品には多くの類似性を見出せる。今回、語りの入れ子式構造と空間の関連性の視座から、「放浪者メルモス」がヒースクリフに投影されている可能性を探る。

---

司会 京都大学教授 ささき とおる 佐々木 徹

## Alice's Restaurant II

### The Semiotics of Eating in Nineteenth-Century British Fiction

---

【招待発表講師】 京都女子大学教授 Jan B. Gordon

It seems to me that one of the aims of any speaker at Eibungakkai would be to be as inclusive of the audience's interest as possible. My talk, though ostensibly on the semiotics of eating in *Alice in Wonderland* (Tim Burton's recent 3-D film has a constantly nibbling, yet anorectic Alice!), is really about the economy of food (an exchange system) in Victorian fiction generally. Food becomes a kind of “circulating currency” which can be “banked,” refused, used as an object with which to manipulate, and as an occasion of sharing and mutual sacrifice—all on display in novels from Jane Austen, through George Eliot, to Dickens, Hardy, Bram Stoker, and Virginia Woolf. I shall also address the growth of an anti-economy among the new vegetarian movement of the period between 1880-1920, and the writers who embraced it.

The lecture will appeal to Victorian literary and linguistic scholars, those interested in children's literature and the magical powers of food, and those interested in language, money, and literature as comparable systems of “input” and “output.” Eating (or not-eating) becomes one of the self-conscious nineteenth-century models of cognition.

『クランフォード』における“インド帰り”言説  
ブラウン夫妻とピーター・ジェンキンスの帰還をめぐる

熊本県立大学准教授 難 波 美和子

E.ギヤスケルの連作小説『クランフォード』は多様な視点から読むことが可能である。ここでは『クランフォード』を「インド帰り」イギリス人の表象という視点から検討したい。『クランフォード』には3組のインド帰りのイギリス人が登場する。ブラウン夫妻は植民地の利益配分の階級性を明らかにするが、ピーター・ジェンキンスの幸福な帰還も、議論の余地がある。

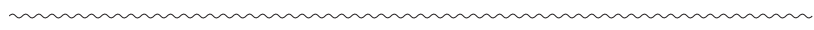
ミス・マッティの破産というクランフォードの秩序の危機は、ピーターの帰還によってインド資本が導入されたことで解決される。『クランフォード』は植民地の金がイギリスの伝統を救うという典型的な物語で、インドは、金貨を無限に吐き出す魔法の財布なのである。ドランブルとインドの経済的な緊密さが、アガ・ジェンキンスの資産形成を保証し、インディゴ・プランターはドランブルにおける産業資本家そのものであったとも言える。

「夢」という名の牢獄  
『リトル・ドリット』における「夢」について

京都大学大学院 わた 部 智 也

批評家ジョン・コズネットが指摘しているように、チャールズ・ディケンズは眠りや夢に強い関心を持っていた作家として考えられている。しかしその一方で、作品中で彼の描いた「眠り」についてはこれまでほとんど研究がなされておらず、また「夢」に関しても、主に精神分析の観点から論じる批評が目立つのみで、彼が作品中に描く夢の役割を詳細に論じたものはほとんどない。本発表の目的は、ディケンズの中期の大作『リトル・ドリット』において、いかに夢が重要な役割を果たしているか、という問題を明らかにすることである。

本発表では、作品中でその夢が頻繁に描かれる登場人物であるアーサー・クレナム、アフエリー・フrintウインチ、そしてウィリアム・ドリットの描写を考察し、リトル・ドリットと夢の関わりもあわせて検討することで、ディケンズが作品の統一的イメージとして夢を用い、それによって、作品の大きなテーマとも言える牢獄のイメージを強調していることを明らかにする。



## 第八室 (本館4階C403教室)

司会 筑波大学准教授 <sup>さい</sup>齋 <sup>とう</sup>藤 <sup>はじめ</sup>一

### 「われわれ」とは誰か 『ロード・ジム』の群集にみる集合性の問い

一橋大学大学院 <sup>よし</sup>吉 <sup>だ</sup>田 <sup>ゆが</sup>裕

本発表は、ジョウゼフ・コンラッド『ロード・ジム』に類出する“he was one of us”を作品の群集と照らし合わせて検討することを目的とする。コンラッド作品の群集については既に批評家たちによって論じられてきたが、「われわれ」の反復によって醸成される共同体観念への問いとは接続されてこなかった。ホミ・バーバが指摘するように、「ジムは明らかに『我々の仲間ではない』として追放されそうになったとき、あるいは実際に追放されてしまったとき、再び迎え入れられる」のである。ポストコロニアル批評の焦点の一つは、集団的なものに目的論的意志や「意識の純粹な形態」(スピヴァク)を見いだすことでその集団の(無)意識を大文字の主体で満たしている言説を問い直すことだった。これらの知見に依拠しながらも、本発表では、この「われわれ」が存立している条件と歴史性を作品における群集の生成過程と表象を通して問い直したい。

~~~~~  
司会 慶應義塾大学教授 ^む武 ^{とう}藤 ^{ひろ}浩 ^し史

『ボヴァリー夫人』と『ユリシーズ』 笑い・パロディ・輪廻転生

宮崎大学准教授 ^{しん}新 ^{みょう}名 ^{けい}桂 ^こ子

本発表では、『ユリシーズ』を読むことがどういうことなのかを、『ユリシーズ』の笑い、とりわけ、パロディから生じる笑いという観点から説明する。具体的には、ミハイル・バフチンの笑いのパロディに関する理論に、輪廻転生の概念を接ぎ木する。そして、読みの実践例として、フローベールの『ボヴァリー夫人』を先行テキストとしてとりあげる。フローベールのジョイスへの影響は、多くの研究者に認識されながらも、なぜかこれまで『ボヴァリー夫人』と『ユリシーズ』の徹底した比較研究はなされていない。しかし、ジョイスが如何に『ボヴァリー夫人』を意識して『ユリシーズ』を書いたか、そして、読者へもこれを知らせる目配せをしているかは、両者を突き合わせれば明らかである。『ユリシーズ』の深層に『ボヴァリー夫人』があると気付いたら、どのような読み方ができるだろうか。また、どのように笑うことができるだろうか。これらを考察する。

『ピーター・ウィルキンズの生涯と冒険』をめぐって

【招待発表講師】東京大学教授

たか はし かず ひさ
高 橋 和 久

伝記的事実の詳細は分かっていない Robert Paltock という作者の手になるらしい *The Life and Adventures of Peter Wilkins, A Cornishman* は 1750 年末か 1751 年に出版されて以来、コウルリッジ、サウジー、ウォルター・スコット、チャールズ・ラム、シェリーといったロマン主義時代の詩人、作家たちに賞讃され、サッカレーやディケンズをはじめとするヴィクトリア朝小説で何度か言及されてはいるものの、多くの読者を獲得してきたとは言いがたい。現在でも、ユートピア文学の系譜を辿るときにわずかに触れられるだけのようと思われる。

本発表では、この作品を論ずるときの常套である *Robinson Crusoe* との比較を意識しながら、近代人という満たされることない欲望を抱えた個人がその充足を可能にする手段を獲得する過程がここではいかに描かれているかを検証したい。それがユートピア的想像力の根源にあるなどと恐ろしいことは言わないにしても。

司会 一橋大学専任講師

こう の しんたろう
河 野 真太郎

ディコンストラクティヴ・コネクション

Howards End における Margaret Schlegel と Henry Wilcox の価値観をめぐる考察

大阪大学大学院

こめ だ りょう いち
米 田 亮 一

実業家である Henry Wilcox は目的（実利）を達成することと、そのための計画性を人間精神よりも重んじている。一方、文化的な家庭で育った Margaret Schlegel は、自他の人間精神を重んじ、目的（実利）を達成するための計画性を個人的人間関係にとっては害悪であると考えている。彼女は両家の価値観を結びつけようと奮闘するが、これまで多くの批評家たちによって指摘されてきたように、最終的には Henry の価値観は破綻し、Margaret の価値観が作品の中心になって、両家の中の個人的人間関係だけが成立することになる。しかし、小説テキストは Margaret の価値観とそれを反映する彼女の精神の豊かさを中心に据えるために、他の登場人物たちの人間精神を単純化し、プロットに順応させている。このプロット（計画）の進行を彼らの人間精神よりも優先させるというテキストの行為に着目すれば、Margaret の価値観の中心化の達成は、まさに Henry の価値観を反映したものとして捉え直すことができる。本発表では以上の点、すなわちテキストが語っていることと行なっていることとの間の不適合性を明らかにし、二つの価値観が作品の中で調和・統合するのではなく、いわば脱構築的に結びつけられる意義について考察する。

第九室 (本館4階D403教室)

司会 川村学園女子大学教授

菱 田 信 彦

C.S.ルイスの『顔を持つまで』とクリスチャン・ポストモダニズム 最後から始まる物語

北海道大学大学院 湯 浅 恭 子

C.S.ルイスの小説『顔を持つまで』は、女主人公オルアルが書いた二巻の手紙の物語 (Part 1 & 2) である。「もしかしたら (might)」のオルアルの言葉で物語全体が終わっているように見えるが、実は、彼女の手紙に続いて祭司アルノムのメモが最後に残されている。これまではオルアルの視点の検証が議論の中心であり、アルノムとオルアルの関係はほとんど取り上げられることがなかった。しかし最後の段落は、クリスチャン・ポストモダニズムの観点から本作品を理解するうえで重要な視点を提供していると考えられる。

Mara E. Donaldson は、他の論文とは異なり、オルアルの複数の視点から彼女の創造活動と変身の関連を検証し、ロゴスとポイエマの統合を論じている。本論は、アルノムの視点からオルアル未完の発話の検証を加えることによって、Donaldson の論点のさらなる発展を目指す。

司会 津田塾大学専任講師

しん 邦 生

フリータウンに死す 『事件の核心』における植民地愛

東北学院大学准教授 横 内 一 雄

グレーム・グリーンはしばしば第三世界を舞台にした小説を書いたが、その扱いについては「紋切り型」と批判されることが多い。『事件の核心』についても、西アフリカの植民地を舞台にしていることの意味を疑われる傾向があった。しかし、グリーンが本領とした通俗的な仕立ての中にも一分の真実を見出す用意があるならば、そこには実際にその辺境植民地を訪れた者ならではの心情が描き込まれているのではないだろうか。

本発表では、グリーンの通俗的な仕立てを支える「植民地における情事」がそのまま「植民地との情事」の隠喩にもなっていることを指摘し、この情痴小説をそのままコロニアル小説に読み替えることを提案したい。その際、この作品が植民地に到着したてのスパイがそのターゲットを追う形でコンラッドの『闇の奥』を踏襲していること、また、スコビーの植民地愛が、対象との距離の取り方に由来していることなどを併せて論証する。

帝国から個人へ

A Handful of Dust における 30 年代のナショナリズム

立教大学大学院 大西寿明

Evelyn Waugh の中世趣味は、これまでも議論されてきた。中世的な雰囲気の中で育ったウォーにとって、第一次世界大戦を経てもなお、彼の内で中世が息づいていても不思議はない。さらにウォーが生まれた 20 世紀初頭は、中世主義が、帝国主義を支える精神的支柱としてヴィクトリア朝から継続していたことも見逃してはならない。

A Handful of Dust (1934) は、Englishness を継承し、中世主義を称揚するカントリー・ハウスと、これに執着する主人公 Tony Last を中心に構成されている。Jed Esty はウォーを「レイト・モダニズム後」の世代と位置付け、この小説の諷刺性を強調する。しかし、ナショナリズムの問題系と主人公の個人的悲劇とを考え合わせるなら、諷刺性の背後に、ウォーとナショナリズムの新たな関係を読むことができるのではないか。本発表では、以上の点を考慮し 30 年代におけるウォーの位置を再検討する。

司会 関西学院大学准教授 大貫隆史

眩暈を仕組むメタドラマ

Rosencrantz and Guildenstern Are Dead における第 4 の遊び

福岡女子大学非常勤講師 石田由希

本発表の目的は、イギリス現代劇作家 Tom Stoppard (1937-) の *Rosencrantz and Guildenstern Are Dead* (1967) を分析の対象とし、その中心主題であるメタドラマ性を遊びの理論を経由して再検証することにある。そして、この作品の劇中劇構造が観客に対して〈眩暈〉のような感覚を引き起こす効果を持っており、それが作者の仕掛けた一種の〈遊び〉であるという点を指摘する。確かに、作品の批評史を紐解いてみれば、既に多くの論考が劇中のメタドラマ性を俎上に載せていることが判るが、メタドラマ的要素と遊戯論とを関連付けた考察は殆ど見受けられない。本論はその視座から作品の再解釈を試みる。

第十室 (本館 3 階 D301 教室)

司会 福岡女子大学教授 岡井 毅

中英語聖人伝における異性装の聖女

慶應義塾大学大学院・日本学術振興会特別研究員 菅野 磨美

異性装の聖女は中世聖人伝においてしばしば登場するモチーフである。聖マリーナや聖テオドラなど、何らかの理由で男装し、修道女ではなく修道士として生涯を終える物語は、異性装がキリスト教社会で禁じられていたにもかかわらず、社会的・霊的に男性より劣るとされた女

性が、より高度な信仰生活を探求する姿として、さまざまな聖人伝に描かれた。

本発表は、異性装の聖女伝に焦点を当て、女性の聖性が聖人伝というナラティブの中にどのように描かれたのか論じる。対象テキストは、*Gilte Legende*、*Legenda aurea* の Caxton 訳など中英語聖人伝を中心に、Ælfric の古英語聖人伝や *Scottish Legendary* など中世イギリスにおいて英語で書かれた聖人伝についても考察を重ねる。また、近世以降ジャンルを変えて男装する女性主人公のテーマとして語り継がれた例として、Barnabe Riche の ‘Apolonius and Silla’ (1581) を取り上げ、異性装の聖女伝が数多くの聖人伝の中でもとりわけ物語的な構造やモチーフを内包したナラティブであったと論じる。

司会 新潟工科大学教授 小^こ山^{やま}良^{りょう}一^{いち}

古英語作品の校訂本と本文批評の変遷 *Beowulf* を中心として

【招待発表講師】大東文化大学教授 網^あ代^{じろ}敦^{あつし}

古英語の作品を校訂する者にとって、伝達された写本本文をどのように読み与えるか、言い換えれば、どのような本文批評の姿勢をもって刊本化するかということは重要な問題となる。校訂者の本文介入により作品の解釈が大きく左右されることが生じるからである。特に写本が一つしか残されていないような場合は、その影響が大きい。典型的な例は *Beowulf* の場合で、19 世紀初頭の刊本テキスト以来、本文が多様に取り扱われてきた。これまで数十種類以上もの校訂本（CD-ROM 版・Web 版も含む）が刊行されてきた状況がそのことを特に物語っている。本発表では、古英語の本文批評に関して、初期から現在までどのような議論がなされてきたかその変遷を概観し、それと並行して、*Beowulf* の校訂本を中心とし、かつ他の代表的な古英語の韻文・散文の校訂本にも触れながら、それぞれの校訂者の本文の読みに対する姿勢を探ってみたい。

司会 国際基督教大学教授 守^{もり}屋^や靖^{やす}代^よ

Middle English Alliterative Verse The B-Verse and Its Metrical Structure

ブリストル大学客員研究員 井^い上^{うえ}典^{のり}子^こ

The study of Middle English alliterative verse meter has been attracting growing scholarly interest in recent years. Hoyt Duggan and Thomas Cable, for example, have made important new discoveries about the syllabic structure of the unrhymed alliterative long-line. Their rules state that the b-verse, the second of the two half-lines, must have one and only one long dip — a dip of two or more unstressed syllables — and that this long dip must occur before or after the first of the two metrical stresses. In this paper, therefore, I would like to take a step further and demonstrate that another rhythmic rule is also operating in the b-verse. I shall argue that the length of the metrically required long dip in the b-verse must not exceed three syllables, and I will present some evidence for the rule against a four-syllable dip.

中英語における接尾辞の生産性

-ity と -ness の場合

【招待発表講師】 広島女学院大学教授

よねくら 米倉 穂

ラテン語系の接尾辞 -ity と英語本来の接尾辞 -ness は、どちらも形容詞に付加して状態や性質を表す名詞を派生する。この二つの接尾辞の現代英語における生産性の相違について Aronoff (1976), 島村 (1990), Plag (2003), Lieber (2004) などにかなり詳しく論じられている。一方、歴史的な視点から、この接尾辞 -ity と -ness の生産性に言及している研究は、Kastovsky (1985), Romaine (1985), Riddle (1985), Dalton-Puffer (1996) などに限られており、決して十分に論じられているとは言えない。そこで、本発表では、フランス語の影響を受けた中英語、特に後期中英語において、-ity と -ness の生産性が形態的・意味的観点からみて、いかなる相違を示しているか、またその相違はいかなる要因に起因するのかを明らかにしたい。

~~~~~